雪古九谷

高田 宏

小説　書下ろし

古九谷

高田　宏

光文社

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二—一二—一三
（郵便番号112）
光文社　文芸編集部

長編小説　雪　古九谷

一九八七年　二　月二八日　初版第　一　刷発行

著　者　高田宏（たかだ ひろし）
発行者　大坪昌夫
発行所　株式会社　光文社
東京都文京区音羽二—一二—一三／郵便番号112
電話　東京（〇三）九四一—二二四一（代）
振替　東京六—一一五三四七
印刷所　公和印刷
製本所　榎本製本

定価一〇〇〇円

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　© Hirosi Takada 1987
ISBN4-334-92134-5　Printed in Japan

雪古九谷

高田　宏

『雪 古九谷』 目次

第一章 雪の夜の九谷(くたに)村 5
第二章 加賀三代藩主前田利常 16
第三章 九谷窯場奉行後藤才次郎 34
第四章 花ふぶきの九谷村 60
第五章 金掘り切支丹磔刑(たくけい) 75
第六章 大聖寺(だいしょうじ)藩七万石城下 98

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

第七章　山桜散華図大平鉢　128
第八章　蟬（せみ）しぐれの九谷村　146
第九章　後藤才次郎忠清帰藩　163
第十章　絵師久隅守景　184
第十一章　みぞれ降る九谷村　193
第十二章　裸女幻舞図大平鉢　201
第十三章　春遅い九谷村　213

装幀／栃折久美子
写真提供／講談社
江崎義一

第一章　雪の夜の九谷（くたに）村

1

雪が止んで月が出ていた。

こんな明るい夜は冬にしかないわい、と若者は思う。夏の夜は提灯を下げてもせいぜい足もとが見えるくらいで村は濃い闇につつまれているのだが、今はちがった。村の道も田畑も、小さな家々も、白い雪に埋もれている。焼きもの場の下を流れる川もほとんど雪で、細い流れが見え隠れしているだけだ。

師走の初めごろには根雪になっていた雪は年が明けた今はもう若者の胸くらいの深さになっていようか。三日ばかり降りつづいた雪が止むと、降ったばかりの雪はとりわけて白

く、月の光のなかに村が見わたせた。

若者は雪の上に立ちつくしていた。こういう夜の雪景色は何度見ても不思議だった。心がしんとしずまってゆく。昼でもない、夜でもない、なにか別の時が目の前にひろがっていた。

昼とおなじくらいに村の隅々まで見えていたが、昼の村とはまるで色合がちがっていた。気持ちがすうっと遠くなってゆくような景色だった。ああ、この気持ちだ、と若者は思う。嬉しいのか哀しいのか、わからない。楽しいのか淋しいのか、それもわからない。とらえどころのないその気持ちにひかれて、こういう冬の夜、これまで何十回、何百回、雪の上に立っていたことか。

裸木の影が雪の上に長く伸びていた。野兎の足跡がその影を横切ってつづいている。一つ一つの小さな凹みに濃い青がたまっていた。月の光の下で雪の影は時に青くなる。

風のない夜だった。白い村をかかえこんで山々が黒くとりまいていた。山の木々にも雪が冠っていたが、昼間だとまだらに白く見える山が夜はやはり黒々と見えていた。

山裾の小さな家から明りがかすかに洩れていた。囲炉裏の薪が燃える明りだろう。家の前のふっくらした雪がときどき赤く染まった。

若者はその家のほうに足を向けた。田畑の上の雪をまっすぐに突っ切った。降ったばかりの雪は、かんじきを履いていても脛までもぐった。しばらく行くうちに汗をかく。立ち

どまると雪に冷えた夜気が心地よかった。
「おばば、起きておんなるか」
若者の声に内から返事があった。
「太吉じゃな。起きておんなるもおんならんも、ないわいの。この夜さりに、おなごばっかしの家になんぞ用事かいの」
八十ちかい年とは思えない艶のある声である。なんぞ用事かいの、と言いながら声は笑いをふくんでいた。
「また、おばばの話が聞きとうなった」
若者は凍りついた板戸を力まかせに引いて入った。
「わしの話が聞きたいのやら、おりん坊の顔が見たいのやら。ま、上がりまっし」
囲炉裏の火がおばばの白い髪を光らせた。おばばはべんがらを摺っている。唐臼で搗き砕いた朱石を、乳鉢で根気よく細かい粉にする仕事だ。焼きものの上絵具になるのだが、すこしでもざらついてはいけない。おばばは雪のあいだ、毎日摺りつづけることだろう。
おりんは十六になった。おばばの孫娘である。囲炉裏のへりで野良着をつくろっていた。太吉の目を強いまなざしでまっすぐに見る。人の顔をまっすぐ見るのが、小さいときからのおりんの癖だった。おりんを産んですぐに死んだ母親の勁い性質を継いだのかもしれない。

2

おばばとおりんの二人暮しである。六年ばかり前におばばの連れ合いが風邪をこじらせて死んでから二人きりの暮しが細々とつづいている。

死んだおじじは明の国の人だった。関ヶ原の合戦よりも前のことだから、もう六十何年も昔のことになるが、明の官窯で下働きをしていたおじじは、宇喜多秀家に招かれた陶工たちに付いて日本に渡ってきた。文禄・慶長の役で諸大名が朝鮮から陶工を連れ帰ったようだったが、それとはちがって、明の宮廷についてを持っていた秀家は磁器技術にすぐれた明人陶工の一団を備前に招いたのだった。

太吉はおじじから、備前の砂川という川のそばで小ぶりの窯をつくった話を聞いたことがある。くわしいことは聞けずじまいだったが、これからというときに関ヶ原の合戦になって、石田三成や小西行長と一緒に戦った秀家公が敗れて、秀家公は行方知れずになり、陶工たちは窯どころではなくなって茫然とした日を送ったらしかった。

おじじは秀家公の奥方、豪姫様に従って加賀に来た。豪姫様は前田利家公のお子である。利家公はすでに亡くなっていたが、秀家公敗亡後の豪姫様は実家のある加賀に帰ることになり、その折り備前と加賀の双方に縁の深い本阿弥光悦のはからいがあって明の陶工たち

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

の多くが豪姫の帰国に従ったのだった。

おじじがそのときの旅の辛さをちらっと口にしたことがある。いくら大藩前田家の姫様といっても、言ってみれば落人の旅であったから楽なはずはなかった。侍たちは明人を牛馬なみに扱った。こんな苦しみをするくらいならと言って旅の途中、夜中に逃げ出した陶工たちもいた。一人減れば減ったぶん、おじじたちの辛さがふえた。

太吉はそのうちに、おじじとおばばが、いつ、どこで、どう知り合って一緒になったのか、おばばに聞いてみたいと思っている。おばばの昔話はいつ聞いても面白いのだが、これまでのところ、その話は出なかった。太吉が知っているのは、おじじとおばばの二人が加賀藩銀座役後藤才次郎の家に奉公していたということだ。おじじはそのころ後藤様に重宝がられて加賀、能登、越中の三州にかけて加賀藩領内の金山銀山の探索に歩いていた。この九谷の村にも後藤様のお供をして来たことがあるという。

その後藤様が大聖寺藩召抱えになったのが寛永十七年のことだった。おじじの一家も後藤様について大聖寺へ移り住んだ。前の年、加賀藩三代藩主前田利常がまだ四十七歳の若さで隠居を幕府に願い出て、いろいろあったらしいのだが夏になって許しが出た。利常は長男光高に加賀藩本家八十万石を継がせ、次男利次に富山藩十万石、三男利治に大聖寺藩七万石を興させ、自身は小松に隠居料二十二万石を持って引きこもった。加能越三州およそ百二十万石という所領はあまりにも大きすぎた。前田家は徳川家との婚姻を密にして

きたが、それでもいつ、どんな言いがかりをつけられて改易や転封を命じられるかわからない。利常は先手を打ったのだった。百二十万石という大藩は幕府には目ざわりのはずであった。利常は三人の息子に所領を分与することで、予想される危険を避けた。このとき幕府の重臣のあいだで、前田の三代目は油断のならぬお人、という利常評がささやかれたという。

加賀の南はずれ、ほぼ江沼郡一円を領する大聖寺藩はそのようにして生まれた。その年の暮れ、寛永十六年十二月上旬、大聖寺藩初代藩主になる前田利治が大聖寺に入り、錦城山のふもとに藩邸を定めた。

おばばが、つい先だって、そのころの話をしてくれた。

春になって大聖寺に引越してきたのだが、町じゅうに普請の槌音がひびいて、それはもう賑やかなことだった。それまでは郡奉行所があっただけの小さな町がいっぺんに七万石のお膝元になったのだから、武家屋敷が藩邸のまわりにつぎつぎ建ち、町家も負けじと軒を並べはじめた。大工や左官の声からしてちがっていた。雪どけを待っていっせいに咲きはじめた花とおんなじに、職人たちの掛声がそこらじゅうに飛びかっていた。棟上げしたばかりの木組のあいだに桜の花吹雪が舞ったりしての、ええ景色やったわいね、とおばばがその話のときはべんがら摺りの手を休めた。

だが、それから半年しかたたない十月十日、その家々のほとんどが潰れるか壊れるかし

たのだった。

おばばは台所で夕餉の仕度をしていた。ごおっと地鳴りがしたかと思ったら、いきなりどおんと突き上げられた。台所じゅうに灰神楽が立った。みると、かまどが壊れていた。水がめもひっくり返って割れていた。足もとに火のついた薪がころがっていた。それをつかんで割れた水がめの残った水に突っこんだとたん、足をひっぱられたようになって土間に転んだ。立つとまた転んだ。家が右に左に大きく揺れていた。

四つん這いで庭に出てみると、外は黄色い土煙りが舞い上がっていて、隣りの屋敷でさえかすんでいた。あとでわかったことだが、町じゅうの何百という地割れから吹き出た土煙りだった。そこらじゅうで崩れた土蔵の土煙りもまじっていた。

このときの大地震で、おばばは息子を失った。

娘のおすずはおばばと一緒に台所仕事をしていたので、二人で庭へ這って出て助かった。おじじは後藤様の供をして遠くの山に行っていた。帰ってくるまで気をもんだけれども、二日して無事に帰ってきた。大聖寺が全滅したという噂で、後藤様ともども大急ぎで帰ってきたのだという。噂どおり大聖寺の町はまともに残っている家は数えるほどしかなく、たくさんの人が死んでいたが、さいわい後藤家ではみな無事だった。ただ、おじじとおばばの息子清蔵だけが三日たっても四日たっても帰ってこなかった。

清蔵はその日、浜方の塩屋村へ出かけていた。届けものを頼まれて行ったのだが、地震

がきたときは帰りの道だったらしい。その道で山崩れに呑まれたようだった。そうとしか考えられない。山崩れは道を越えて田を埋めていた。山裾にあった数軒の百姓家が消えていた。清蔵は運悪くちょうどそこを通りかかったものか、百姓家の一軒でお茶でもよばれていたものか、そのときその数軒にいた者はみな死んでしまったので何もわからない。

おばばは繰り返し山崩れのところへ行った。行っては土を掘ってみるのだが、山が一つ動いたような土砂の下から清蔵の遺骸を見つけることはできるはずもなかった。無駄と知りながら土を掘った。清蔵、清蔵、と呼びながら掘った。

この話のとき、おばばは両目からとめどなく涙を流した。あまりの涙にびっくりしている太吉に、おばばが言った。

「悲しいときにはな、せめて思いっきり泣かねば……。それが人というものやわいね」

そう言って涙顔のまま、にこっと笑った。太吉はこういうおばばが好きだった。

死んだ清蔵は十六だった。おばばは子のできるのが遅く、すっかりあきらめていたときに授かった子だった。清蔵が生まれると、つづいておすずが年子で生まれた。清蔵もおすずも四十すぎての恥かきっ子だった。

そのおすずが地震から七年ほどして生んだのが、おりんである。だが、おりんの父親のことは、おばばは話そうとしない。おりんもよくは知らないらしい。何かわけがありそうだった。おすずが明人との合の子であることとかかわりがあるのだろうか。

おばばとおじじが、おりんを連れて九谷に住みついたのは、おりんの八つのころだった。後藤様が藩主利治公の命で九谷に窯場を造ることになり、もともと明国の窯場ではたらいていたおじじも九谷の山に入ることになったのだった。

3

あれから八年になる。

おじじは窯ができてまもなく死んでしまった。おじじの古い記憶は窯造りにあまりは役立たなかったようだったが、それでも後藤様はよくしてくださった。小さいながらも一軒の家をくださり、おじじが死んだあとも山に来たときには「おばば達者か」と立ち寄ってくださる。ほかの侍衆とちがって威張ったところがない。

ほかのお人では九谷の焼きもの場はできなんだ、とおばばは言い切る。太吉も、そうやろうなあと思う。親の素性も知れない山猿のような太吉を焼きもの場に雇ってくれたのも後藤様だった。おばばの口ぞえ一つで、その日から雑役に入れてくれた。ほかの侍だったら太吉のような者を入れてくれるはずがない。

後藤様は山に来ると、轆轤師（ろくろし）でも窯焚きでも誰とでも気さくに話した。山にはそれほどたびたび来るわけでもないのに、なんでもよく知っていて、それはこうやってみたらどう

だといった助言をしてくれたりする。後藤様の言ったようにやってみると、たいがいうまく行くのだった。

後藤様は太吉にもよく声をかける。仕事は辛くないか、しっかりやれよ、といった励ましのこともあれば、今度の窯出しでどの焼きものがいちばん気に入ったかなどと、若い太吉の考えを聞くこともあった。身分も年もまるでちがうのに朋輩のように話す後藤様を、太吉は不思議なお人だと思う。後藤様と話した日は、いつも気が晴ればれした。

この正月で太吉は十九になった。

冬の焼きもの場はひっそりしている。雪囲いをした窯もすっかり雪の下に埋もれている。雪のあいだは土掘りも石出しもできない。細工場とつづいている泊り小屋に、雪がくるまでは二、三十人が寝泊りしていたが、今はみんな町へ下りていった。藩邸で上絵付けの手伝い仕事をしている者もおれば、雪のあいだは別の仕事に雇われている者もいる。村はずれの比丘尼(びくに)屋敷の遊女たちも町へ下りた。九谷の村に家を持っている者だけが、こまごました仕事を家の中でつづけていた。

家のない太吉ひとりが小屋に寝起きして、よほどの吹雪でないかぎり毎日山の木を伐りに出かけていた。春になったらすぐにも窯が焚けるように、薪の束を積み上げていた。

おばばはこの夜、宇喜多の殿様のことを話してくれた。

関ヶ原で敗れた秀家公は伊吹山の山中に隠れ、まもなく薩摩へ落ちのびられたという。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.